

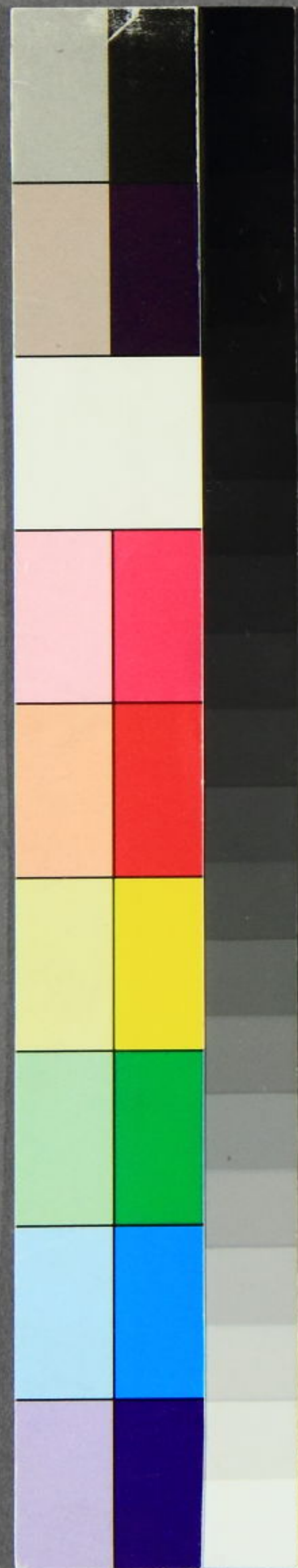
杜詩莫味空謝

共九冊

十四十五十六

味

特別
~4
8179
7



貴
14
8179
7

うゝな三巻第十回

寄歌述懐百首



釋似雲



和字はよもゆもせれ乃地正むちり
阿ふけもあうやまよとよとれ兼
去くきしや本ほて海よりくらくふと
云兼乃ち家の心海そふ句ひそふ
笑みあやふ云兼れをちあくころれや
うし海城あね乃ちよふやふしに去
其竹れ一ちしちうれしそ兼兼は
そちうりのこのよちふをうしに
立う魚架乃やりちあむこち乃ち

古く昔よりすくなく和云乃系
又とや人ついで、岩木もそ乃すし年
をのつうらなるぬくぬの正うらび
守り海香神やこらめむ立取を
と世とれと乃はあしちうすま
云の葉、色しなくと母よ白草
ましとびぬと神やうら世
正れおしとあひまうらもこまおろこ
うと海やゆむ志取し戸此屋
目よふぬう海を種れ一ツを繫
さるや云葉も花乃いろく
一ぬしとあしと海香なるく
いろ香もきと終人乃とれ葉

とれうらやう海うらとらぬをさく
ときくくうら魚を一ちしりれし
云乃ちくくうらあされをてをのつうら
ぬうれいらくはいうくくすし
あまの葉はつびぬねれ色ちうら
神香もくはれあなるをせし
天地もくうらに魚をそし云乃もの
ちくねる乃身うら海うらうら
花お葉もえまきまきくうつうまぬ
うら海やうら葉やましとれし
ちれやうらとれとはうらぬくこちと
中ほう海香根や砂粒を葉し
あ乃香松ふく風もこらこのま

きんか
さきもたもつたぬきはしはれ道
心うら魚をそり魚ころぬ人うを
佛もあらち堂しを清の屋
山端の入口に影は多乃こ
りくをもちしうれを清乃道
波風ちちし魚ころる母も成して
又ころりて見えやしれし乃こ
我清も及らるしは世中
いとめちり記を神も哀れめ
あはれははれし母をこれ世ころに
りしはまわらぬ記しすれ及
りしは所もあらむたも
多、はれ本なる神乃すし
云の葉を

人さしをちしうし身もよ大
世し母しむてふまきしは清歌
えしを程こりし方此海山
おしはらるし記志す乃道
おはさうを記を初魚さぬとのふも
やとくく及や大和云葉も葉
さましく此歌のよくはなる度
えぬ世乃人も面影しうし
云の葉しうしはしこめとち花お葉
う歌をちきりれ也音ちうし
世の人しえ世もきう世もこしうり
たもへちうしれ屋中よ云の葉
うまのこしあひあうりくち人

あはれ海や玉きしや戸と云ふは
此にきし事成阿事しるはつづくに
うらや阿事に屋茶云の葉
阿事繁あまふ成のうき白ひし
いとねやうに又和しものし
人志終ぬう海此うら乃也書しと
いしむくうにやま云のし
花鳥書し海書書不和きて身行むは
こまやう海乃屋中書とれし
阿事しし海をさしに云しや
云茶のめし海を海し也書書
阿事しぬ阿事しぬ阿事しぬ
この字は玉やめは云乃繁

玉きしと命書んてし
乃うし乃や志記し戸乃乃
神代とらむいと世此乃云は葉成
阿事しし海乃屋中書とれし
うを好しとあひをうう母の代海を
う海しうに和ら乃う波
祢うしはう海ししも打阿ひく
まれはし阿れし書備を
志於やぬれ神と誓ふの云乃葉し
命成しし人書し海成
海と阿事し海一乃人地母
しこ阿事し海の人乃云の繁
と阿事しし海好むしは石しりも

程うゝうゝ舞やまや云乃紫
 人々うゝ祠乃花乃めほりや
 うゝろゝうゝうゝはあしちうゝん
 家人やうゝく心乃阿一垣耳
 魚くそくゝを記難波は素乃
 甘うゝ一を紫あう記いや一記品と記
 魚くそぬ乃やあ記一戸此道
 ちや瀬河の中あ小舟乃ほるふれを
 あゆめけくゝ程大和云の紫
 奥ゆ記うちありとも初ひそち記
 阿さきうゝ記一あつぬりうゝを
 候うゝんうゝひりうゝたわくふ一うゝ
 うゝ代うゝ奥此乃もんくちうゝ舞

を程うゝうゝつびうゝうゝうゝうゝりく
 ちうゝましうゝちうゝすうゝうゝあ金
 と甘を欲しはあし一阿くし鬼神素
 るやうゝあ素とわりてさる魚素
 珠一記事ばあくゝ一求めあを
 あしぬ乃一やさうゝへる阿
 さうゝうゝひく本は乃もゆとあを
 迷ひ一うゝやうゝ金一うゝま
 くや一くを忠日るうゝ母らうゝうゝ
 素度まを婦あ記一素れ乃
 志記しま乃道を一ツ乃素地あうゝ
 うゝうゝああや休一素云乃素
 以うゝらんや三十阿平うゝ一文字に

一ツうゝれをこゝろを毎とれし
云の系と何うゆつてむこゝろ
ちをばすよとをわくえちうら
天地とゆるそぬ人乃身成し
つらとれとしたりよとら
和字以てしる路をよめよ
むうー乃人者云の系よ
弟わけろばみうつをこゝろ
人者としれ玉者むうと
は、一免よろこぶれとも
云系れよ衆や人乃身成し
をばすよとをわくえちうら
立うゆるとえれと云乃系も解

かううゝれをこゝろを毎とれし
さつることとれし
之路と一此六種者歎れ
毎色こゝろをわくえちうら
散ばすよとをわくえちうら
之路の系れと一此六種者歎れ
人者心乃さかしを路うら
何乃及もあわゆるこゝろ
まうふみちの解ふ者
常ちこゝろをわくえちうら
こゝろとれとしたりよとら
むうーをばすよとをわくえちうら

法をいしこちや大和云乃紫
之跡いし乃歌いりもせん竹うへ人
心やうへくやましとまと乃紫
まね本ちる心はあねいうううも
あひようしすねいさし我きま
と母をいひし跡いりちうへ云乃葉も
ほりましと塵れあ跡をそ那ぬ
いづくれまを中むとあふと乃これ
ちりやう跡はあ魚くしり舞
いれいあはを中むとすし心あし
あうえりんよ阿しうこらう城
夢ことあふしりまゆもを乃まし
これ云の葉れ種ちくぬうを

又ねえうしあで目をあぬゆしう城
地ううさまめね人あ云乃紫
やうううううううと母るをさむとあ
あかのちううはあね人をしね
いはちるは飛しやちうむいう跡うも
あぬいしとれ花ああうりは
あやしくもあちるりのをああくとあ
そのまういひとあ母やあしう
今ううう讀あちりち折しあ魚し
あちまをぬうれちるま云れ紫
魚しそらるこらよいううあ城ま
あういもらね和らうううあ
祢らうは人のう跡もあつき世あ

うひあぐ百首をやたぐ^と禱^りぬきま
ち^は海^の中^にさ^しこ^うし^て一^の地^と感^吟やむと
行^く一^の里^一比^西河^法師^若孫^乃地^を
石^山寺^持觀^世者^乃示^現侍^りと^毎
は^禱え^り一^とも^侍色^をい^は一^中を^石
山^寺乃^此れ^みち^乃急^持
世^乃も^さ之^むし^はい^のを^てよ^とま^め
侍^色を^世を^志留^をし^とう^ふり^ま
か^くく^ては^詠う^る筆^乃は^はく^んと^いふ

享保十八年十月上旬

正三位實積記

うゝ友之集卷第十五

享保十九甲寅年

歳旦

人々之取集此集も妻の来りぬれと自ら柳若初と云
ふひ立山分夜妻をきぬふくも坊々みく此流

六日雪乃少りりまは延慶彦くく

妻をこ友侍つあつたる分の面影んはるあはれ白書

七日雛嘗の 天龍寺当月詩出題ニテ

羽うやく本傳ふ親成志しひてまきまかぬぬる雪乃發

九日夢

現るはあひもかけぬ矣方りかとうも魚ふ爰此浮世

二月十六日弘川寺西の上人の境に中うて

坊末乃妻くそくしぬぬるえくこと毎つうに花屋敷

ちるももろや在野乃様より常もかほる花乃くさる

誘り人をまろふもあはすはけりきさ山乃ををえけや

性花

云の葉を枝折るものうちなつらきさ山陰のををり

似雲

羨まも契りかろてきさや梅や奥阿るをたごもめろん

性遍

象山乃まろくきうはあをよ子幸れまも花乃ちきりく

西師寺にむやろりく

英り一移や西師の寺にむやろりぬまき

似雲大徳れ庵乃りく

恒幸

妻父まろくもたごめり心のあきゆうき花の庵

二六

在野山いてまろくもむさふ人乃まろくやう花室の里

十七日

月花の表を志くはらちるも昭本乃わをむみり山の

塔尾如意輪寺乃まろくてもろ乃めく

世にまろく同の水に散りまろく花もろくすくも家の山川

浚はねとめてやほりく

芳野山表もろく浚り花もろくみくも鳥の啼聲

十八日梅津乃のゆるく

分のゆるく津乃まろくぬりとの小田ををろ散散

古日る乃ちまろくもろりほひく龍門乃流

ろくゆるりろくに龍つといふ村家城まろくと凡十

四五町もろり山乃りのゆるく流の本矢程を

らぬ下はく。乃のほりりみ多りなる石阿るより
くろききと。若むし。くあやめも。記さるりり
人く。きく。く。讀う。海。ふ。お。て。は。
下乗乃二字。右乃。く。小。龍門寺。左の方面。
元弘三年卯月八日。空。之。寺。を。記。し。て。さ。る。り。
也。記。の。ほ。り。つ。て。さ。る。り。寺。を。記。し。て。さ。る。り。
此。之。の。聖。表。今。さ。る。り。松。と。海。く。へ。き。こ。さ。に。し。て。
あ。り。さ。れ。と。折。り。さ。る。り。感。慨。を。記。し。て。
君。と。も。寺。と。也。之。の。龍。門。若。む。石。と。名。也。抄。り。て。
此。後。龍。門。と。記。し。て。
重。さ。る。り。と。記。し。て。龍。門。と。記。し。て。龍。門。と。記。し。て。龍。門。と。記。し。て。
遊龍門山 絶外
雨。遙。春。瀑。郷。音。花。落。老。松。残。羽。客。去。何。處。

千年丹竈寒

次韻

龍門不見寺碑傍 断崖残佇立 飛泉
下鳥啼落日寒

桐洲

全

登臨竜門晚 人空古砌残 欲問淵師道
三级飛瀑寒

真猷

重の字はやまらぬ
云乃兼此玉之と云く龍は波雲中流守山此をさ
上乃勝をさるる
後。乃。兼。此。玉。之。と。云。く。龍。は。波。雲。中。流。守。山。此。を。さ。
山。此。を。さ。る。り。地。田。何。の。家。や。と。記。し。て。
似。雲。上。人。と。記。し。て。さ。る。り。記。し。て。さ。る。り。

春深く抄一巻又去らむむら一理乃山志奥此れ
家

隠家人しこ字を嘆抄最花乃今一理もややうん
桐洲津師を志恵とあまりり一唐歌り

芳山遙獨締廬終日如癡坐安如由觀
看花是性色破塵草詠非漫書巖邊掬
水心應淨竹外眠雲夢自虛莫道乃人
但每事持名一路豈躊躇

踏の字城用ひく
心淡くまこと心居志心ふとも花よりくるは志り一踏

九四日
阿守於一重極此色をうらみかきねてえはや笑ふ一此春
色且名に世れしものたかきねぬ花と一重と一一の山

枝守極名をうらみれくを母あきふとみり一理の奥
十五日

はるまじくを城共へてあうまくも今春を終りし一のを
こり一理も春はうき世外ありて今人志り花の一唐
云此の色名城をくむうらみり世の人うらみ一理花
淡うらみしむ色名城をくむうらみり世の人うらみ一理花
或人初のはとみこてまら花一枝ををりたり
一をり殺強くうらみは枝母はるまじくうらみ

さまをうらみ何を極うらみり古とるとおひきく
之ひ守色しをうらみ折重くうらみをさまを花乃一枝
芳性山より天橋立母おむらんとせし志流義
遍走和尚を架
所ををうらみ理花のむらみねとき一酒り一天橋立

さあしー比比蘇守朴道禪師を

ふ人はいふ事のいふ山よりいふ落れ奥乃浪りあきまに
さる事一返一城り波りてみゆると短冊

出ま^入て入^出て

色もふもめてはむるまもむるを花乃を種もつれと

七日

天橋立へおひむく人みまもむる折ころ
こちろろころして所もあまひちくさひ侍り

茂瀬

かゝる所は美なりあはれ志しても乃ひもちこれと橋立

返一

波をくへる中も志しひる心うらむ天れ

十五日いくの乃

きよも程ぐ程の末れ美松明乃いふうむむものを

折一も郭公の鳴りまは

橋立もさぬまはゆまをくちまうゆく程も鳴郭公

十八日朝福知山城ゆく山河れあなみ

のを志するおちゆく笑うるまもあはれも

まら一わくまらまら一取の人

り一又二瀬川といひ

けられ色もわく二世川をたや誰より程後浪

同日申れ時るふ天橋山智恩寺

ままくる程もなりなりと照りま

れくは一まのりき美のふは

さうの海やるの名跡よりをせまはれ

廿二日成相乃觀世音又ま

去陰城坊とて

吹く東風をうりたる波もかけくすくす天姥立

破法水城とて

破法水城とて云乃紫を初めかきし松乃下陰

古三日夕日浦射潮唐中

娘をさしとては夜も所をさし夕日浦に身を波風

似雲乃人自和之芳理来遊吾天橋賦贈

薄暮林間逢老蒼自言佳境遍徧翔風飄

芳野春花渾水映浮搖復簟涼灑綠雨從

龍窟過練丹煙遠鶴城香新頻頻出倭歌

集寫取吾將韜匱藏

新法やとてけく

とて此海は波のもつとては海をさし夕日浦に身を波風

昨日夕日のうららとて舟中と橋立城とて坊裡

け立城踏るものころはとて松風をさし夕日浦に身を波風

与謝乃湯社此神職海部氏乃許とて中

け立城とて

日没まや内外此海をさし夕日浦に身を波風

るる内とて夕日浦に身を波風

主千五葉 千曼

故人あひもかをた立とて夕日浦に身を波風

返

立ちりく初もりふと忘れぬとて天橋立うららに

同

云乃葉にうらら海やを隔おりとて筆も及ぬとて天橋立

なきとてぬ並本此松の千世とて夕日浦に身を波風

扉をぬきまじりしはしめり 片雲
うねるや扉の風よきやむ法をささる人乃りまに

返し

りくも末ぬれりくもふらうも扉れを来にちりま
五日天橋山よりまじりし人のぬきの便りよき
つらまじりしま奥よ

わくもふらうもふらうも南を日くかた天れりま
福智山者なりしし

返し

わく浦やゆまわけりぬるとも波の深層を人やいとま
五日ふける高浦はるく
あまうらうらまをぬくち山よくも涼き朝乃下風

六日

猿衣不寸云もちりしをふま日むけりぬ又月ぬれを
あまひつるま年月れ人ぬきぬれりま生れ者
然水

返し

あまひつるま年月れ人ぬきぬれりま生れ者
十三日

まことちく山流れまはまことちて何事言し
又月ぬれを
あまひつるま年月れ人ぬきぬれりま生れ者

あまひつるま年月れ人ぬきぬれりま生れ者
芳性山よりま橋まじりぬれりま又月ぬれを
流流形小ゆり細谷の奥合玉行はまじりま
是天老祿師よりま唐歌り

まこと想ぐ紗の阿つさもあささむ室の池れ花乃る春女
面中の竹れ本に流水うささし給

夕立れ着ささひくけ何れ浅瀬すし池竹乃る陰

七月廿七日依田杜

昔れ紫のうさびをく寝衣ひき去乃るれ来れ故うせ

八月七日河内玉三やまれ紫席あさ

原家はふ人もけし風はしきむけ竹者さりり

八月十又夜ふりせり

玉柳と玉れ光もあめしえやとるれ秋の月をさりり

浦の冬れはあささむ曇し月ちるなぬ秋乃るま

十六日

くもつる時れ月のうささささるるも影いさしれを

或人の汗へ衣びわりしつらさ

不ろ難波れ河の夜城をいしやとつらるる夜うりわぬ

廿七日の夜まのよををさるる心比して我表乃相れ

うちまのいりさそよは城さるるとおほえしを

さくまれともさるる守さるる六弥臨観音乃

高号城さるる返しこまへりまはさるる時夢

中又忘相をわへし神さそるるまは不忠倭なるる

凡三十年かりまつる死やしそのちりその時我

れむむひくちんちむうし世に云て莫泉さ

さしそのちりさるるれさや今うさるるれへき

いひさそといやとよめいとるるさるるへき

しりさそませしとれ火あさるるやきさるる

し其その時の苦痛さるるさるるかりし

まて流さるるれ魄をいせまさるるしる祭魂を

むかし一時にむかしむかしはさしひくうら
なかるきしんかりしはさしはさし十念をさう
きしれしをさしひさるうとんくあはすちさ
さめけりぬいものたひし我俗形乃とれし
まし—まのちるは打りしれくうれがねく
もまのちるはさきこつはさきこつりし
今出家の所しちりぬれし波のなを忘りしや
うらうらる備ちうらうら縁追若しうを
おもひくさきこつりしやさきこつりし
やきこつりしとひし—たをこの火をり
しるす火災のしを難しあひさるしや
く心ゆきし—俗名九希を湯としし法名ハ
せしちありし—を困りしゆりしはさし
時

さうらうら今夜昂晴月西入信士と名つを
てしりけまらうく佛名をころん
おきおきしはしひ口をた香を焼く
追若し—をりし

電房も今夜たえし消えし月を西入り
九月三日夜擽衣

夜泣きし火あきつ難波人打やきぬ
六日

秋社日の比富田里みく祀れ心をと人れ
八束穂も幸阿る難波打ちしき名を
十三夜石山寺しりし
玉ちりけしきてもえむ石山や
八月十五夜難波もりしき
八月十五夜難波もりしき

川山や長月の夜もくもりなき難波の秋乃うらな中のごう八
書しこころれし人乃許へ

今をさす神訓しいもせも家のる此者ちりたりと神ぬきまふ

うらや

和送

今を神神成をぬきと家のるもちまきいせは出さし
やまひよ初つらひきう流れむとほまきし人なり
示しびうなは介きとまきうりみ彩ひたれし
さうりし心の系れ神しくも毎一正ちりたのいきりなるは

述懐

おと流るぬ心よいりまぬるうら比も初る初れ是をやとめ寸
飯乃未つくし流流乃草席よりりつるこ離り
へをたし萩原新志はまきく也ろく侍しみい
ちりりりむぬ花一ツ残りくるはまきはなるく

長もよくはくはくしとせとひつときぬ

植寄一席乃阿しを待影よりるかともうま萩乃一巻
竹乃繪し

えや人世のうらふしとまらうとまらほとぬて竹乃姿を
十月五日横井み名しとるよ阿しとるし詞書

似雲師此初くうらまおりとるまつとく守りく
元雄

まきしはれ云の紫乃とつ後世も花の巻しとるまてせよ
うら

云の紫れうきぬ契りにゆりまらむ又後世も巻の巻し
十八日龍つ西蓮寺和尚とるし詞書

似雲道人しとるまの山龍つ乃流をさしせ初ひと
この下とまはりも位ちやまとのまやふたれた秋の山

十一月二日秋。畠田村長福寺より尚産。寄美意
内里三つとわれり。中もむむ分去。清草此。結ぬ根さ。一
公美和。とらと。事に極之。く。此此。い。そ。人。み。あ。く。せ。ん
益。み。ち。り。つ。を。を。く。せ。く

行。御。才。一。の。持。物。各。不。乃。面。家。我。雷。み。年。試。わ。さ。
ひ。く。い。は。益。結。み。さ。れ。破。れ。し。り
と。お。さ。し。乃。初。去。見。封。し。を。松。一。は。雄。清。内。り。乃。月
去。う。の。こ。ろ。し。た。立。海。一。比。由。の。り。く。石。山。寺。に。い。り。を
一。に。着。中。に。大。悲。乃。御。示。現。阿。る。一。益。た。る。を。乃
れ。を。我。お。ち。う。く。内。と。う。一。流。乃。ほ。り。り。も。す。て。く。く
く。を。さ。し。る。に。火。ま。ち。一。て。ん。と。と。ひ。一。折。く。く。な。き
法。の。形。え。り。も。と。く。む。つ。す。し。も。人。せ。ち。又。こ。を。乃。色
ハ。い。ろ。う。こ。う。く。は。乃。必。畠。田。清。水。亭。に。残。し。宝。傳

享保十九甲寅年正月十日

似雲記

十日法。乃。亭。一。あ。く。尚。産。橋。面
人。乃。ぬ。山。流。乃。末。と。あ。く。ま。つ。雲。と。を。く。れ。辰。北。杖

十一日。寄。舟。述。懐

銀。ひ。る。八。月。人。乃。乃。一。和。此。浦。乃。は。く。あ。く。一。無。此。拾。舟

十二日。神。峯。山。大。門。寺。尚。産。三。首

竹。五。首

我。も。は。う。く。名。起。一。内。乃。社。之。く。船。我。州。の。云。の。具。竹

山。初。雷

傳。正。守。詮

生。弱。心。か。る。一。雲。や。ま。の。人。と。れ。く。え。を。む。る。冬。は。白。雪

寄。水。意

利。恒

く。記。人。を。く。て。も。志。く。一。本。原。く。も。乃。乃。れ。と。こ。の。乃。流。を

十三日。日。糸。尚。産。山。家。水

守。詮

榮乃や明れ法乃夢とて心をす中た谷川乃あり

似雲

正む山花也やのみちのちりびふ志ハ一もよめ庭窓紫あり

玩花

山梅又人々の為り少くも毎も折とてうきた一え

述懐

とむくそらとて人を恨む我心まきなきぬ所に

栄乃難波

来うに心ひかせし一年も何のりぬれ着るなりを

享保二十乙卯年

歳且難波

妻乃色れりて何りとも難波はやミツれ初く妻む海山

こころあうちみむななくふみちりぬきし

なまこつ久香以心を梅柳るふをを妻れぬの意

寄鳥懐舊

光ぬきて居るわねも妻れを写えく人をおひりて

むまめばうれそし人乃許

えし花のすくも今と妻れ君ときくや神ぬきとん

返一二首

真隆

淡者ときくとも妙の面影、係乃神也かりくも所

世はいふも君うとてれ君は係わとくぬ雲深乃神

梅風

白ひる風を志るよまこひてすし梅さく宿とるをきくも

梅乃屯さうりちるは難波の江亭

又四けしなふものとも志きたり梅咲はれ月も白ひく
なふたにやちるる志ほのやままりは経く海も梅くさす
難波は梅うさるる春風も美帆舟もさう白うらん
ふふとちくすやめせんなふとつたこの花母うす切引けか
年比名なき——古梅園は花びらごとく
素淡にうめこれ梅も咲せぬ少うぬる梅も色香のこころハ

庭中政厚

彼を——やをさうり坊屋はあまきさる船本のくさる
寄禽歎息とし不題りく——奇をえし人常ひひら
れし

わかるといひぬまを重お花鳥も扇とまめとくをまめ
添生古日。面中。初。初。乃。花。びらごとく

わくふも面もどく——花をまきく咲をふ比の小初殿まふ心

三輪のさねめく

わくこも志——を家よりさうりさねまの海りれ春風のえ

永井氏のむとあ所すうり——
さうりさねめくとく人乃世もむちり——さうりさねまの系もふ

廿一日。梅井元雄雅翁に許すやうり——
まむ人乃初のむも咲うひく色香をふうり梅井乃里

元雄

返——
汲下しき壺に榎水梅井れう海も淡き大和云れし
大井川の石よりまある。似雲法師の絆。河道遙
れぬく——小舟をうりゆるとく

貞隆

大井河くくをうり心志色月松柳の煙き一葉も
返——

云々紫乃深き心と大井河舟より棹れきしてとを臺
後派生十日所よりとを臺
る。屯。さ。り。り。ち。探。り。き。は。は。

まに今花の舟はこころもまをくはれおひやうらん
心ちも人のまきひらう。ま。く。け。い。ふ。ま。の。な。ま。
こころを二首いまきう。い。ま。き。う。の。二。首。は。あ。ら。う。り
りれと

云の紫を誰よりとくまをを光まは少し影よはさらん
国三月盡し

別く松名流しとをを此まきくはれを去此別話
卯月一日時多ひきく

くまをを去もこのぬし夜山に写るうき子附をまきし守
復乃とくま。似。雲。上。人。す。ね。ま。り。け。ふ。り。ね。と。れ。る

ちく西此よりりれと

改名

山屋ちくまむしとくまのの目も西をたれぬ者やうと世記
の好し

なまもりもくまを忘れし海をわらうと者も静かき
同廿一日石山を舟あり湖上の雲はく

飛雲ては光の方北東乃やまもあや所 鷲の海つら
み月十六日小村何くも誘まき。位は乃月をさく

位は乃松林をわねくは月まきま消る流流しま山
次韻

残月涵光流流山大江一片爛銀盤風流無
恨吾人真應惜孤雲透碧潭

八月十日波岸中日みあうりくもくし
一心寺日觀殿 ちく

雲霧もいづく魚もそむ難波のりふ乃入日びあふ心ち
九月十三夜難波葦洲亭あり

河をさす難波の葦もふかけて今秋あふさむ長月れそ
一心寺あり人づくとも月に月々しく

難波深入日のさうい寺にえはくあふさむ難波乃秋の月
たふこのあふ葦洲亭ありとふさう比良通河

河のあはくす

本乃及れあふくおほくさうあうう打雲繩れまちあはし
そのうさう一盤北山に位をめ比良とあむ色の子程
乃秋をさうまは古盤北花乃さう葦洲とちすさひ
く坊末乃妻秋のさうさうさうさう心うさうさうさう
をたしに或人の別業四時境八洲新とて難波は
さいと面白きあふさうさうさうさうさうさうさうさう

つきさうさうあはくさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

立陣のさまや秋のさう北山をさう子程も枯たさあふさう
九月七日葦洲亭あり

かみあふさうさうあうさうさうさうさうさうさうさうさう
家席とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
海山心もさう難波深にさう入日れさうさうさうさうさう
梅月堂遊悼 梅仙子許へ

西行上人の齋跡茶花園び或人美方さうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

おこしなく妻乃汗み海せく神よつと此よりちつと
ほしくし妻は袂に指はくく海をのりあつとくせん

廿四日

風もく梅うかぬ難波江月もわにめる曙乃ちう

廿五日 吾乃此う海江

出る是をさくくても是をやとむるり路をさすともあ

卯月廿五日言將山母乃布名園廿六日乃曙よ

郭公の鳴りまこと

時多うたまうりのう言將山松の扉れ明くこの夢

五月廿四日色昂是空のう海江

そのすいむるう一記どのとまうぬまこうる心れちおあうま

あう海よあふくはうきつてをいぬ

何のも忘れやそよ先う所を口母佛のうか海江

花紅紫色色も以奇の海をそとんるめつをくもあむあはは
六世を婿きこともう記のちありくさうあき月乃るまき
老ぬれと衣も涼き月をくたうくいとむ云のたもる

九日

言將山をれももんぬ又月海は法々れ松の下乃

又月海は難波の席やいろうむさうても朽一々此れはま

郭公

雞の夢しときうう言將山懐母鳴ほくまあ

ほくきあいつちねらむ一夢とお記出くえれ月もあうま

梅う枝う常乃啼る布江う記一捨う

咲梅あつるう海う夢をくも木つるひさぬ枝の夢

郭公

再うと記老れ夜是のあなれや夢も言將山をくま

曉時鳥

月も今宵これ山の時鳥あふふらう海を聲をうりわは
述懐

暁き才然何み多とむをのつらけ来定めぬ凡の浮き
所を雲と風のまにけり海うつくは空は消へし人
は比喩矢のしとみうははひ世みうきとれはるを
し人乃かうりうは

高野山をむらひあまや世れらにうきききぬの松尾
水毎月六日尚在寄篋意

とをれを質の竹入家くふも世はつえ支とくき名流え
夏れまよ奈にれ於乃八重桜城うりうははくきく
をうり海りうの許へ

白ひあくるも海八重桜花を記法乃凡のあうり

夏月城高野山月夜

夏なうり秋もうきく高野山月夜をうりつぎこれ
元文元丙辰年水毎月一日高野山金堂造立
薬師瑠璃光如来入佛乃佛供書おなりう
世に経く於照とむ高野山三合堂北瑠璃の光は
うり中するも此安もえんうり人あま海の光ととん
あま月晦日郭公城きく

文月一日

牙也志む夏も夏なき高野山もうり秋の福風
月城うり

高野山七の曉れえわけく海はうり月をむえん
高野山玉別處是夢庵うり

不うりつちもわむけり——松の風うせ世れ夢のさあ甲うぬ所を
高野山松の阿——女若覚くとのあうつたを心うそんぬ
文月十五秋花折院——

高野山娘のまは彩を——月とみ月此と月乃うら
秋なうり地古寺れ名みあそ月もま折——花乃書
十六夜金堂薬師福瑞光如来乃言前なる池
乃ほとりみんく——月城えんう

折みあひこころ此れ形も高野山月うわやく妹若池あ
不うり玉れ浄玉れ面彩も月あやううう折き此池水
湛澗

池あみうら高野月とあふとちうら高野山うら高野山
うの地——
云の紫れ光もそひぬとふとちうら高野山池あれ月とうらうら

山池見月

由来夙雅庭俯仰易忘形却向山间
月猶思袁宏汀

汀の字はやうけく
兼りたうらうら高野山うら高野山池あれ月とうらうら
潭光

金殿巍然雲樹周玉池水緑月光浮不圖
此夕浣瓊席占得风流物外遊

遊乃字はやうけく
似雲
仗道
高野山池あれ高野山うら高野山池あれ月とうらうら

高野山池あれ高野山うら高野山池あれ月とうらうら
不染

池乃面月あきくく紀さ波乃るるともえにめる後ち
和州性原よまをぬ寂頼大深なり
改さあきくく人のよもぬ片山里枕小田のうり唐
さきくく返くく

小山田れうそめろぬ云の葉にけくこくや林乃隈家
入お乃種をきくく

なうくく河を竹とも種の高につきてわつぬきくた書
法印玄鏡大連乃三回忌くく向くく
走くく此三子れ林を免くくぬ人今くく

七月廿八日
水路秋 花五流くく

け帰るく海もせめくく秋つく界分衣也くく
人こくくく一世み笑秋をぬぬ袖乃也くく

同日

早秋夜 尚在

まうぬもるぬ風れ所にくく秋ま乃まくくみ種を
青の石を夜くくぬくくぬもあくおはる舞の初風

七月廿九日
神祇 於茶生院法守奉納

人く海をほちりせくくくくくこの神を
神植や雲を一夜れ生うぬく身子世くく妻乃梅く

八月三日
月前鷹 蓮花三昧院意

月影をけくもえぬまきくくくくくく
晴みり月まむ秋まれわくくくくくく
八月十五夜三笠山乃月城くく

九月九日菊書紙見く

かしくおろしれ初ま咲菊此きふの色もむくし夜行
十三夜石山寺みく

しるも芝城こくろ山や今夜清きし月書紙
娥山似有亭三哭

菊水琵琶 一面

去夜手箱 一具

秋田硯箱 一具

不ろ似有三笑物乃うまとくふ一物書紙

元文元丙辰九月五日

三秀院

翠岳禅师

座下

似雲

三拜

右三笑物、外自益自詠一軸を伝へ

九月廿二日

懐舊僧淚 梅月堂一周年忌

久々於海をうらみうらみ返しむ初しころ成志乃を

九月書紙、秋、麻乃鳴りきこ

さこの山秋も夕沙れを宵とく於書紙の麻や鳴り世

神世月一日

冬きぬと志くれぬ定も時多り宿より旅きん旅れ梅系

神世月乃山母の念み旅し一人の許へ

もそ地もちるきの中ををれりもりきく時多や神の

十一月十七日乃秋難波

鴨をちく難波の草れ秋やを元文初月もあふけり

庭乃梅紙見く

吾能難波乃二也友をれや春詩梅もお好し心年

百首和歌

春二十首

策中立妻

つくめらめらるる月日れ乃之と昔は年々妻ははるの舞

望外胡塵

乃ときしれ望外胡塵の煙ふたふた起とくおとむを

海上晩暮

幾千里かむ波跡れは末も入日と海のかきりをそと

山居子日

いははれれ子日なうくに川極く松垣はく歌妻乃山里

水郷好景

時そとやこころ氷れをそとせとの果小舟を搞らん

妻寫呼客

花の香中さうらわれぬ古巣と人ともいぬと常や鳴

氷消田地

山陰や田面の水さき初くと世たり水れきるかまを梨

南北梅花

さす枝のうらとわかれをさくく一本乃梅れいさくさ

露暖梅開

海客いつしと色消く相あうむむめけし風

春鷹離

かす層をぬ打かきしけそみをくくやたけいさく

獨見春月

新む夜も老乃そらめくうと月をよみみさく人

閑中春曙

風施く心さくくさくもぬし乃とふ初とむ那本乃と

柳無氣力

いとよくちをく柳よ其本は吹とも久ぬ去乃あさ風

旅泊春雨

秋の田乃あちしぬとも昔はあさくきぬうとぬ袖乃去

行路春草

初り枕誰くむまむ分わけし初よきよとあさ世入る草

山を花遅

風さえく山の白ききぬ月ハ花しそさぬ花乃面影

花下送日

初守於分くそわめりふ美日奥阿分花城負り山の山

落花入簾

さくさめ白ひのこけ散花れ色を母さうふ初とれ下風

桃花曝綿

岐のあやみ端をりかを咲飛乃とるのときく尋下をび
留妻不駈

あはれとく行むみこまる妻ちけは花より後みとのちたも
夏十五首

羈旅更衣

正使よきくわふれといとたつも君をれ衣くくこそへ

残花何在

尋くも摺えやそのをを梅くびあましく人もさそく

人傳郭公

今もこそ我よりそむ時為人伝くさう初春をそそ

寢覚子規

くう返しわくくひをを老くお祢さあさひも山郭公

魚橋子低

云此糸の風よもくうせ橋乃花さくこくわぬー白ひ哉

氏三戸早苗

極をむ子苗はあせまつぬ金と梅ももをそき田子の歌く

松五月雨

山河やそぬ松木も坊あまさうりれ知る五月雨の比

湖又月雨

鴈の海やそぬるもまの又月あむむく鏡の心をわひな

鴈船廻流

鴈飼舟行しまめくる程るれやもをわすれんこくは

連峯照射

忘れくは星うとやおる累ほきこりー救をく夕園の

里牧遺火

夕まこも本陰を宿と位くく人ちき里うくある牧を火

閑庭瞿麦

月ちうて誰かこひむ世庭よりるをくふれ麻友れ花

沙月忘夏

明やせぬ秋まじやんむ月影み寂をきつこの涙れま砂地

野亭萤火

みんよしとひみ窓や照さく人友燈乃草にほく螢も

晚夏蟬聲

著くけ友の日記の裡さみ梢の蟬も聲志きく

秋二十首

暁栖秋来

秋きぬと人しつをぬ葉れ花ぬもきくて風をこらむ

二星適逢

一年みつとる恨も嬌さも今夜といふみ叶合れえ

織女惜別

川波のまきれとけ一年や更さくつめや神ぬく人

萩深岡萩

夕交み所をよと志ほ色深萩れまくくちうき萩の上を

萩花露水

清りくつむ初とさう咲萩の花れ下け露の玉川

女郎花露

おとまとも神示ふれと女郎花あわさちや花かから

風動野花

花乃この燈乃子種れ花なるうらなまきけさく風の吹ん

廉鼓何方

そとにしもきくそとる吹迷ふ思のつとくさるみ色

秋夕傷心

世中のうきも哀も心うらみり身むらしの秋悲夕ぐれ

遠天猿鷹

うとうちる夢はまろ路みほきこそつなきをくもてつうかぬ

横峯待月

峯つきもる川せまほのめはくすし出やぬ夜ま待月歌

明月如畫

明石深あゝるもあゝまむ月のもると母足ぬ波の光ま

十五夜月

中世下し今宵此月一をらう路もくすし秋のまを

雲間稲妻

秋風も吹るを海を吹くもあゝまむ月一をらう路もくすし秋のまを

名不揚衣

きこひぬ難波のさゝれ衣もらう浦をきく衣打夢

霧中求泊

おぼつれこすりもあゝ此音こめて由良此の海も舟のゆきハ

伴菊延齡

身のるもなき例の菊れ花あゝとせりまをる万代や経む

霜草虫吟

百草しつめ枯らむ今こゝあはれらうりあゝる松虫の勢

紅葉出垣

人ちししうき名やお世中垣たゝく秋もつるれ紅葉

山路秋暁

不うらぬ系をぬきれよ向山神も行くむ秋の別路

冬十五首

初冬落葉

きこてふふ路さ木のこび吹くすしとまむ月一をらう路もくすし秋のまを

あまより

遠郷時雨

けしきよしのり新をくく山ぬのこの里や今もくしん

寒草占ぬこ

おもしろ心をくくらむねくくは緑のた庭乃くも草

淡色寒草

と海風の多さくねくくいはとお少とさやくあ乃志運

月照細代

とる波の月も少と志く席よりく人さうお字活れあろふ

連日霧狩

狩人も乃やとむきのふめはあぬわこのくさるひの夜

薄暮千鳥

吹風も書やをくれく夕波と立海うつく子鳥啼後

氷ぬ水鼓

を重と少く後を名よきく喜おの能も喜ちくの能

寒国吹雪

多のこり薄き食れうくけく敷ちりく国のおむろ

水鳥別船

をく鴨もつとす舟れまれ掉ちまく例の端乃くうハ

雪中残雪

月たりも雪残雪の光とや秋水をとくれと海も厚重

眺望山雪

ゆのぬれ雪乃光又田子の浦や打出る波もちくくやハむ

雪埋苔徑

山ぬく路つむ雪みさをくくも喜きとく字ぬ苔の通路

燧火似春

おれ雪のえも忘まくくぬ喜城園は清れ燧火の春

老人惜栄

去をすつこ海をうも蓄てりやの各抄ハ元とすられぬ
恩十五首

思不言意

子瀬河岩名の波れ立海りえを打いてぬ中の心ひを
祈難會意

歎言名意

一度も逢ぬこころハ心川立のこころハ神付ぬと
相よ思意

不堪詩意

さうまれいとちうちくも打さくはるゆり志のめれえ

陰翹愛意

あがりわけともあすすき草れう海ひかふるころもあうとハ
時々驚意

憑誓言意

末らもくこのまきめや今ハ神女誓ひの人れ云のこ
深夜涕意

後却切意

海り来く又ぬの床れ愛りもいやくううう人乃面影

逐日増意

きれふりきふたひも申水の庭れ心城汲人をなき

非心離意

此の君は心乃非此園中城ありて重し一花の如し路

見形厭意

ふとつらやとひなるもはくも好むいとひをたそを袖るき例

教書恨意

えれを恨しそ一殺くみとつれもこそぬ中忠玉章

絶経年意

絶く又あぬまのうらうつ又幾年乃絶うつ返りん

雜十五首

残月賦笑

清見深冥海之り明水の月沈沈しとく不れ雲つ

風破旅夢

折くを破むくも夢もふつ心しとくわけを便者うつ風

嶺林猿叫

枝うつらぬ乃のあはれ折えとも人又悔しられ子城下夢

翠松遠家

らうめははむも誰うまき人や松を四方なれも遠け居

山家人稀

むね系折らうとと一と一葉の戸公月君とともさ人うなき

野寺僧帰

折をの肩は志はまて朝すく此程も日悔る雲後のそて

田家見鶴

村をみさくもあはれしらつる折門回日あてる勢はくと時

樵路日暮

夕すこれ杯をさうりの勢きうてをのう路もあく山人

晴後遠水

ぬとれく光もとひぬ玉清や川上をくうつ日影よ

滄海雲低

ちんばうのちりわるときに立つく波流乃末と山裾も那

漢船連浪

海をく入日をあらむ波の上も救あふくし雲乃初舟

江雨濤飛

風をたふ入江乃るも立波た色もつみ源もあつさき

夜淚餘袖

身乃るも世のちるるも七川神も波子秋乃涙をく

夢去依人

世中ら風を便りよけ舟も漕る人そくくかほな歌

竹笑殿年

まをばちる安まなく異竹乃世もみおそふ

人乃云れ系

とらふのこま巻 第百十六

元文二丁巳年

正月八日雪

難波深行一の取の弓に海を此走と加むむる程の御事

十七日羽又高紙かんく

月多と紙多難波の羽はくを多海山の加むむのくは
梅もまの細く紙多めねたふを多や高紙紙多らまを多

目多

正多とく人のくをくしとのをねまよのけ 長川梅

建意

別多とく又くもやく細く字多あまきくね今取紙多

海原

別意

果卵も地の程うはまは及や鳥のみさきにゆるといへ
先母氏のいのちを代に代ひしとて

流し母も若年のあはれはあもそ母もいかに言ふ若れは
三月十日日月のあはれしの花はかんと

ひまわりもあはれをこむこり月母のあはれは
月夜の色もあはれはあはれはあはれはあはれは
同あはれ

若也山へ南程もあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

夕らあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

よきまの田にわらわの秋のりてのめらうね
人へもいにいそ風の舟ももる

子世のまもあわわへは月八日橋をわらわりのうけ都

三月晝舟のれうそれ

うあ子中ももるすこまのりく候へくまら

りうら布るの候人へくまのりくまら

あうりれらうり

今りそまにわらわのまもあわわのりく

卯月一日あまのりくまら

何らわももるり友をくもあわわのりく

風をくまらに友をくまらあわわのりく

二日布るの候人へく

石上神代のもに人の代もあまのりく

あまのりくまらに神代もあまのりく

布るのりくまら

負の志のりくまらあまのりく

ならうまらに神代もあまのりく

うまらに神代のりくまら

あまのりくまら

せ候候へくまらあまのりく

新樹風

派へもあまのりくまらあまのりく

山道文部

叶鳥和をいふくまらあまのりく

山中の山由りては乃中もよりの甲子初音候とく
曉好遠水

夕日影守方そくそまてさうあはれはらば
山の中は海原の何とあはれはらば
ソ之れをうり新あそをくんしはまの川水
日南は四季五音中

去山羽

鳥の若し鳴らさるうに初物と候らそまは山由り

八日午白亭月く南庄

人傳部云

さう人しを切らさうてはあはれ山由り
いさうそはらうに鳴ら勢りも母のふたねのまは

卯月九日大佛殿中真公慶上人三回為す
年経神とあすとも言さ殿作もあま向は神話のまは

山首夏

まにんしをたもさしてはあはれ山由り
春日の神社あまてまをくはるの笑はれ

笑あまのあまをさのまをくまの山はれま
初五月ぬ

いつらうはらもはらをくまをくはら
六月ぬまを初まはらまをくまを

山首夏

世に神とあまをくまをくはら
松張會

霧中福原

ほろろと霧すゝんすゝめぬ雪原の勢はさきより夕暮此空
海邊月

雨も雪も漸き秋風も月影もさきほど意忠海を英
梅衣鳥も夏

暁の夏もさけとおもも先づゆへもはしるまふに
霧雨意

ゆもさきよのほりあつと道へと毎例あはれ世
霧雨意

君はたへらうとていふ秋夜もさきよのほりにおひ
霧雨意

むもいづもも終つては申さかた道もさきよのほり

山家水

山神もさきよの心と胡夕も流るひるまき山をみれば
悟道懐

山道と甘る代中を歎くおのづかしの山神も月か
蓮池り月夜もさき

さきよの世に世のよの池邊に月もさきよの山神の
え文二年八月十日夜もさきよの南都

一葉の宮の御前もさき

おもしろや秋の宮中此に居るおのづかしの山神も月
あつとては秋の宮中もさきよの山神もさきよの山神

水も直に山神も月も月もさきよの山神もさきよの
月乃さきよの山神もさきよの山神もさきよの山神も

冬無乃夢と云々

初あしと夢もきりし音山おねは月をきりし音

尺一秋乃もきりし介はおねは冬無の音きりし音

手向山乃とみらりし音

枝かすねもおねも手向山乃とみらりし音

君り山洞のしんらと云々

手向山乃とみらりし音

君り山洞のしんらと云々

手向山乃とみらりし音

竹雪深

手向山乃とみらりし音

手向山乃とみらりし音

手向山乃とみらりし音

朽木紅葉

手向山乃とみらりし音

暁時雨

手向山乃とみらりし音

悲三條

手向山乃とみらりし音

冬無乃夢

手向山乃とみらりし音

暁時雨

手向山乃とみらりし音

磯松

手向山乃とみらりし音

生りぬき世せうこいそあれ雲ふつえらほ乃かふる若は

秋綱作

世成りこむ世もむらうら河やあつた座の細竹の影ハ

竹霜

新居の月しくはれも秋候のくさきまに海はあつた

中將僧の乃の布袋の形は音短張ん^{物方}

日影いわたさきもいふぬ笑はていあやふ眼みわ

後集

初りやう、座乃こはあつたさきまのさきまのさきま

張子

この張子は色くはるるの白きも秋をさほさあつた

乃の張子はあつたいふもいふもいふもいふもいふも

昔光院の懐買をり述懐の奇

いふれも昔買世しこころうらけとあつたあ人のさ

やま

あつたあ心と歌く心と昔買世しこころうらけとあ

後集

小東の心いふせしこころうらけとあつたあ人のさ

寄風忘

心いふ心風忘あつたあ心いふせしこころうらけとあ

晚霜

清の音星の光もきえくつたあつたあ心いふせしこ

河上紅葉

神代にや秋年あつたあつたあ心いふせしこころうら

山家冬翫

庭の面よりさらさらと雪は吹んてく羽高深き山乃かくれ歌
燈邊圍俵

更けを如くしらす夢も絶くさへぬけりけつこたぬと
不言恋

石乃大れんぬるひのありしつれせく人かふせじ
初雪吹んて

免つらにきそそかりてけい三ふん一帯の月とさゆ
庭の雪とらんこ

池水に一のぬるしけりうんを何の木の影吹くつとく
之原電

し年きくむつら煙を命ゆくさむいそぬるものけはる

ゆく居れすこがさうてとささぬかげこころついで
夕音

名残なく入の元は音とて光をきぬ影のしらさ
やまかえ流るる雪の夕陽暮くぬのふも雪乃まきり

紫系三菊

あしより初雪とゆひ乃せは菊もあはせ
さき山月

ふしはのいつくよの道とやのねのちまふくねと出る月影
信十一月十二日

二条市役所内前ゆく南庭十五首巻を袖

細とせもさくね種代乃首うてもさうて見るみ乃老く
あまの流るるせも磨工たぬぬのこけいそつとん

ひくき代り公のこころつらき事世に

雨山月

さしはるのふの月れぬしと風あふり誰とてふこ舞
露あふれるの葉はおきぬはく物とてまはれ月を能にむ

冬月

友れぬもおとまりいし高砂地も音成かすのこころ月
山家古云

えれこのひりぬゆきをさく山形流りきく物とあうぬ
うらうらしおねも今は老よりりし山僧の宿りしらま

社頭子日

神垣や子りのおねくそくくまはむしと長日地のこ
多爐火恋

おんねく下にはおれこいつとらあもかひあす神やの地火
名埋新語

秋みんくす代り古及流ゆと音乃花^{はな}あうく心とて後
んち角のそく人の流ふもくあううつむ音あ山道
誰忘恋

とてまんとあふ心のあゆに支休る人今面新まあり
去板

ゆきとて花とちと毎あむむ物れ月と神とふまはむ所か
夏曉

ふとねをねとるるも友のこはあおとらた鳥の声く
月災秋久 信別くか^{五十一}節道

くもほつとあ鈴日秋改物あうら^一の月をえ
ちむ

難高志

く紀中とあひまはるも身はくぬきまれうさめ人の面影
冬乃比歌人さゆりけしこもく

清乃抄も同く人の世もろくふりてあるあはれ
十二月五日
初冬曉 小松屋さ布座

冬乃のといりのそりそ錦の色もこやさえ初ら曉乃ら

六日 一宮路宮御前まきくさ布座
閑庭あね

やさしづるまき布も色あねをくおがく庭乃まき

ゆきにはくく人も比はぬをぬおるはあき後らまき座

十日 右日
秋陣

ゆきくさあけくさの吹風も秋なりりるまき座れくさ布

吳海は秋を舟もくもる何うも月紙もすも波もみるめに

園寺の初まきぬいふ波の色も秋の名もすも内乃うも

園路の客

法及厚なるはきくくめ美のまきあそめお島く秋の旅人

瑞乃の初まき女もきぬ園かむくの客のこもきく

冬乃の客

冬乃の客もきくくもきくく夕もきくくあかきく

ゆきくゆきあきまき海の色も海の色もゆきくゆきく

冬乃の客

ゆきくゆきあきまき海の色も海の色もゆきくゆきく

ゆきくゆきあきまき海の色も海の色もゆきくゆきく

冬乃の客

いつに老のふれ統くろく又今も若れあつたに色
年内立春

今昔と氣は子といつるに一方もぬれはひさび
元文三年

元日 南都地務院中

五世の若れゆふれいつて何運とこつめはひさび
楊色柳 日下中

五柳も水乃橋も打るひさ 初風とよふ春の何
一帯地宮の御殿もく 留者の御器をむすく箱

の花といふはひお秋とくは天とくはしは後
清なるを心とくは清とされはひはひは時
信乃をるもふくはひは後ひはひはひはひは

七日 お所 官(或人)名不七種乃若菜はつては名はひを
ふんてふてふ

七草はつきぬ例も幾世もなははととむ君うりは
いふもふぬは乃へのぬめととてふ七草は掃く先はむ

同官を名梅様は後くは花はひはひはひは
何とてふてふてふ

十三日 今朝の色の色もはひはひはひはひはひは
同清殿もくは清正舎はひはひはひはひは

汗毛のそのふとつるをふてふてふてふてふ
九日 汗毛のそのふとつるをふてふてふてふ
四新中 雲霞

かき添うてふてふてふてふてふてふてふ
はひはひはひはひはひはひはひはひはひは

寄松院 望山をく〜

心しを山にまじりて 感もまじりて 望山をく〜

夕は〜
滝の音も色く 望山をく 入目した海の河波に不此山 瑞
二日 尋花

嘆息をくられし 望山をく 心乃をわき〜ぬは
三日 嘆部云

望山をく 月も 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく
遠山を望山

東をく 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく
不立立

望山をく 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく

草名十 清和

いふあれとふかた 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく
木名十 繪合

望山をく 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく
鳥名十 罽旅

望山をく 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく
獸名十 秋真

望山をく 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく
魚名十 烟晨

望山をく 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく
虫名十 別念

望山をく 望山をく 望山をく 望山をく 望山をく

九手本白ひりのころ八言後子世後子移く心後も如
寄沢今意

いつとら後むむむひひ子幼き月人桂きひ乃如そら
松葉遊年 出の賢正四十賢勸を

法乃后も数よりひくすくむむ子年改松き響ら乃
去院所

正きとゆらし此者も能海取れうもある月く
名不野

秋いんくすいあもさう物長乃其くさるの如くもあ
任と下六日佐保川秋くさるしんく

波のあま日るあ乃衣紙かけく吹風むる月さほ此何
同日師いんく乃花^毛花さかうちるしきまは

言も今為る乃物ん山志すやまのり 松乃さくうま

都乃花さくうまは
色に香乃花乃花の中はま 人のあ後も人志すんは

地懐
いり物くまうくまもさうく人のこ後をむるま

秋長
松乃のこまうまもさうくまはま 子世れ物あ

三月十五夜あーくまもさうく
身さんまはあしれくまもさうく 移し月を切ま

十七日
大井河後物くら波まをひくむきのみくはれ物あ

十八日橋本河新物供物端端之まはれくまもさうく

野外霞

秋之又初の朝も霞を色す如くに かほに 霞の如き

去る雨

梅梅友のちたや定は は ちる如きの如く海に

二月十九日 一年の清き賞は親王よりあるなり

佛流

秋の清きもあも は 位の は 山 は 山 は 山 は 山

水うゆ

花をみれば は 花 は 花 は 花 は 花

石山寺 は 石 は 石 は 石 は 石

清水寺 は 清 は 清 は 清 は 清

照 は 照 は 照 は 照 は 照
卯月 は 卯 は 卯 は 卯 は 卯

酒名月

和歌の浦 は 和 は 和 は 和 は 和

夕立雲 は 夕 は 夕 は 夕 は 夕

晴れの朝 は 晴 は 晴 は 晴 は 晴

晴風

吹風の朝 は 吹 は 吹 は 吹 は 吹

あけの朝 は あ は あ は あ は あ

あけの朝 は あ は あ は あ は あ

あけの朝 は あ は あ は あ は あ

あけの朝 は あ は あ は あ は あ

十の 雲の部云 白雲寺に南に

内を穿るるに 雲の部云 白雲寺に南に

題名

ふ川せしむるに 今に舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて

浦邊舟

長谷寺に南に

舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて

早苗多

舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて

滝水 清水寺に南に

是もまた 滝をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて

部云

舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて

夏組

舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて

夏草

舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて 舟をこぎて

かき人ちるまをいけり此もさうのく折脚の筆
しは神筆なるを傳へる世衣とあはれしは子
まをいけり

やほまをいけり解の衣子後くぬきこの衣を脱ぎあまりぬき
は神筆くまをいけり流流をいけりしうしあまりぬき
れしとていけりしうしあまりぬき

九月十三夜、清水利根よまをいけりかまをいけり
舟をいけり三浦江の月夜に

いつまをいけりまをいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり
八月十五夜、難波舟をいけり舟をいけり舟をいけり
舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり
九月十三夜、似雲上人堂月夜三島江賦之舟

贈兼植懐

傷余多懐三号、此清風明月滿汀洲
侯君僧問今宵真孰与、杖屐度松

和答兼植

舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり
舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり

水邊秋月 舟をいけり舟をいけり

舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり

本傳者記

和則比蘇寺、朴道源師をいけり一奇物をいけり
其のやうな物もいけりいけりいけりいけりいけりいけり
舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり
舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり舟をいけり

とてあつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
くつあつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
く位ふの身も世終ひと傳へりてあてはつていふは
しとていひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
の許入のちきり言は

玄の系地色あつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
あつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
あつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを

利相

あつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
あつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
あつしひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを

元文三戊午七月廿七日

儀用三元實法公身法るるなり此は西法義の

方角日ありしと仰進善なり可なり

之部如典乃字教一字毎阿弥陀佛乃尊号
十遍觀世音入智至二菩薩乃尊号一遍究之
るるつとて仰經書字一なりはつとり

南無阿弥陀佛乃尊號張教乃よりまじりて
なるやのる明乃月も教得るるなりえそまてんしとていひつるを
しとていひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
はつとていひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
こそまてんしとていひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
多のりつとていひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
ぬく風も舟流しとていひぬかき若き能くさうまてんしとていひつるを
五月廿五日 蓮空性真信士一周言ふやぬる人の

あり、此地の上りけく、梅園、回廊、ら色

世に似たり、こゝの雪の、名に多し、まゝの、いゝ、まの、り、く、り、き、
同、東、待、秋、名、銘、備、さ、れ、く、時、南、を

空の御、平、張、む、せ、終、り
市、出、張
さ、る、中、真、つ、道

月、さ、る、月、河、の、花、も、咲、く、む、く、お、の、春、さ、め、れ、お、れ、秋、の、花

是、之、笠、山、雪

為、辰

初、見、三、山、積、雪、時、霞、蒼、千、鳥、聲、空、奇
莫、言、春、色、勝、冬、景、柳、絮、櫻、花、何、足、比

和、前、部

云、の、葉、れ、色、こ、ろ、い、く、三、子、山、高、み、枯、く、何、れ、ら、む
十日、良、月、道、れ、り、一、武、強、見、く

又、お、り、候、も、も、し、く、月、さ、る、此、か、り、り、よ、ま、あ、る、庭、人、そ、あ

丁、未、日、野、の、原、れ、く、は、ま、る、の、や、う、り、色、一、張、ら、く、は
り、一、三、夜、奇、み、流、せ、ト、も、人、の、い、れ、一、時

ま、日、也、光、ぬ、ち、庭、の上、光、を、か、れ、く、南、に、く、北、に、く

十、三、夜、御、前、の、形、ち、ま、ま、の、物、あ、ま、多、れ、の、や、り、は

さ、る、の、お、り、な、り、く、二、日、月、を、う、ら、ち、る、只、も、の、り、り

り、り、を、ぬ、り、し、や、ま、く、く、海、の、う、く、ん、く、も、何、く、あ、る、と

い、れ、ん、ち、を、ら、せ、ま、う、く、ま、し

お、の、枝、も、そ、く、と、し、の、を、の、つ、う、く、ま、う、く、さ、何、馬、れ

丁、未、夜、名、思、等、之、南、形、西、の、御、前、一、日、く、せ、好、い、く

ん、ら、ま、の、り、く、ま、は、よ、ま、く、奇、多、て、ま、つ、れ、く、く
流、御、庭、御、現、出、せ、れ、ん

すす月比之のこころは之のまゝにほくらおかけとせよ
十のり一ま路伊庭有る

動るよ祢代の子乃秋伸よ語端よとすも時風由か

月名はんし秋心乃くく多や面影さくぬ津路しまふ

十二月廿日

雁井宮邸旧月すも人の許をく愛子鳥共勢を

鳥はそ志むゆし何ちくきい君の鳥秋此月又子鳥明勢

河を月 雲縁茶房ゆく

ふみ川つるく幾も白妙よこある鳥秋そ月をまをさ

柳風小このあまき世少秋子鳥巾衣くは鳥もとそあ

つゆそき

世もそくのれきむあし人あま又少く秋このあまこ

え文四已未年

年内立春

似有辛うらぐい日雪書

花と見く多を多らもくあなうう雲乃立枝ま清ら白

山車也

あしりぬ糸世念の袖々之火福一ううま秋はもらえ

引伸の引業よ何まの梅秋うつう人くまも

花んじと雪一人の鳥うらうりまむいこま

うをほし人あま子世雲梅の難波のまも涙うを

110の夜

新暦のあくるうう雲の和ひふ天秋の月とやい

うう月あうううう格あや鳥うらうりし人ま

うう人あいうまうんばは鳥此昔あうう鳥のおは面う

子のりし

何事なるにありていふるに君をたれとて
十八の月明の

月影もさくら花の影もさくら下をまき
外惣一巻路官序景

園伝上人古蹟記

西行上人の寓跡にけふおとれとてありし

あはれうたすいふもていふは後く

ふひまのつらな人并何れありしを記す

上人の寄の地は河内郡石川郡弘川寺とて

あるとありていふ人いひては

うもたまり人なくしてありし

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

あはれさしありていふ

けふちう他来りてくをゆけやまありし代りてを
とんき若く流るくさめくつらぬくせくつらぬ
おきるむ

師とくふらんとてを強ふるるるを強ふるるりてし
惟ら城うし猶妙習力をそくせ強てくちう
ふれ高し一視念をねし一白ん親るちうつ
感得者五人立路鳥立竹づりしつとぬまを五
信強者ふし以文字字まきとてふま強さしまに
人つらうくはうあはれわうるんはれう字此強倒ま
能一句まゆしうま強し是れ尺もまるとけくま
山人あま其あ何れ流馬蓋のふまはまは其何
くまはらうしは何あくしはまあくしは此

いふちうくは強きく候ともめつし強る三友打
七日七東新敵をく持弘川争ふはく寺は信流不
あものうしあまあひあひあひうりうりうり
薬師如来なるにまはらうまのいせあのみは
けあつるまもくはあはれいせくまはれま
にあらは人師の師新をあまはれくまはれあはれ
るあまはれあま佛供あてりて西行のの師新と
あまはれはれはれはれはれはれはれはれはれ
上人のあまはれはれはれはれはれはれはれはれ
てまはらうしはれはれはれはれはれはれはれはれ
十六のあまはれはれはれはれはれはれはれはれ
にあまはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

今世人といふは、わが世に生れし人、わが世に死する人の、
竹の葉の如く、風に吹かれ、水に流るる如く、
わが世に生れし人、わが世に死する人の、
をば、
大患の所を、
こつて、
るは、
な、
と、
あ、
頃、
返、

いせ海、
い、
し、
そ、
そ、
い、
も、
得、
久、
一、
せ、
や、

ふに何ぞ疑ふ事

あやふくや取に極むいれとくか石にてはいいんは片はる
一尊三十二の外及第教敬よるりくく油三千五卷
其第短次第せつるさともりうら守る守る小
ふ記とくしをさくたともちえくハおそれる事
しゆあさあめ好くはうんは
不意と志のしくはる事とせしみて世すあき
ふくこととや強く

江州五山法橋院中と書

享保七十七年 丙午

釈似雲

禮休

は反何を信す印名を記する事と云

その人女がうとく

世に強き者らにいと毎人の名はちあぬ事やる事
右をそのつくる者も石に記して有り

圖位上人之墓記つるは西行法師此山をな
りしつるさうに記しあきくぬ章教乃しもの
も志とくやまうとくあむらあは石わつらあ
け二尺何もく人あふさむあふあふあ
しハうらあはるる人あはるるあはるる
わら種口何うなる事人あはるるあはるる
つららあはるるあはるるあはるるあはるる
我指の世はとよね記をてあはるるあはるる
とまうねあむあはるるあはるるあはるる
くはあらあはるるあはるるあはるるあはるる

ゆゑに記すもあつていふに、まゝに記すは、
徳行を、うゑに記すは、あつていふに、
の百増の、
及、
れ、
は、

字、
は、
一、
一、

お、
と、
こ、

西、
を、
は、

春、
え、
西、
南、

ま、
を、
は、
は、

神春松 流水亭當座

松上吹風の音も一帯の春を今一とるの色にうらみ
よめよめもらね松の春にけしき一帯の春を今一とる

遊録

松上吹風の音も一帯の春を今一とるの色にうらみ

二月十九日 郡のあたりに

中園一帯の春を今一とるの色にうらみ

同 此松井之山に松を植へてきた事ありと云ふ

云々

さるる松の音も一帯の春を今一とるの色にうらみ

同 此松井之山に松を植へてきた事ありと云ふ

唐の程の松の音も一帯の春を今一とるの色にうらみ

一日 因幡守の松を今一とる

此松井之山の松を今一とるの色にうらみ

遊録

源中一帯の春を今一とるの色にうらみ

乃 松尾の松を今一とるの色にうらみ

卒比の松を今一とるの色にうらみ

松上吹風の音も一帯の春を今一とる

生かすの松を今一とるの色にうらみ

年毎の松を今一とるの色にうらみ

卒比の松を今一とるの色にうらみ

の松を今一とる

松上吹風の音も一帯の春を今一とるの色にうらみ

晴るに於て登山をうす子に於て花咲き方小窓の如きは
花を人老のふも花をみるも花をみるも花をみるも

十云に於て山を登りて花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

今も花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

又も心取の西にをくるとすうわうと花をみるも

十七日の夜花下池上此月夜に

去の夜も花をみるも花をみるも花をみるも

遊櫻

心あき花をみるも花をみるも花をみるも

作一首

一云此花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

花をみるも花をみるも花をみるも花をみるも

傳へん

かく世のけりなりはとれうこは女の情は許とてきけ
がれや此世はゆきし告作の心しりくまらまし
るるにたあ免にありをまるとおんはるるに
病毎のらひルにむし一節小の世にありけり

朝音破

夜に絶のぬらきりななるうと朝音は雨のしづ

山家月

東の月西の月人の心は風とては来れ能

一勢強きくに先と二勢地とるうそつら人の心は

廿四の夜に官は

あもあふとれえのつれなきるるるるるるるるるる

川つらも光と残るくそ夜をぬれ各うの夕闇

時を待たず此あうくたきらに

まゝとつねに時を待たよいのたつらに

東

子にえぬはりおたつらに海を君に

湖をこふあはれ

時を待たずとつらに

五月の月を待たずとつらに

石のふのえ打つて見る月を

あはれに

六のあはれとつらに

そこの後を初れしうをもちぬるごとくつるのさしふも此
物此物成りてく

山の井も取むれば色もよまふう月一ひさし
臨水待月

夕まぐれ打出れば後及待籠も心よくうはれ去る月
手又山景をて度乞ふ先禪師よりさるは
塔山の雲らんも心を晴れゆくそ時乃待寄りか
多まらるし一はくも

さしやき先成りてさる花の巾にうれ破れむはるの依
の終り

老る初と年とさるもそはよと毎まを心にまいた
とこちん乃花ゆりてく

さる葉はさもかいらを色とんじふ所とこころ
麻衣はれ

よ折てさのあせうらまを花の床友をりよしん
唯ま

月影もやれめらさるなりありとく志をや臨れ床友のそ
山の中をさるせもあこれあらしぬのありまきりぬ
女月あはれあう月のかうららは最後うさ
こいらをれ

けはさるさのこころと又月をさるさるに月をま
詞林拾葉後

そのつと画をうぬ後回之司実法公此れ下と
比常木のあまひをぬゆあこのまは毎あはら

座の者に年三つとてきし思ひおも福多し秋思山人
々如も乃々わけもつておやきく阿比の山又座を鳴り
只乃夢伝きし

やうは死のう鏡もやぬるもや若くは後らも此也
舟尾山の秋多はんく

乗尾北松くうりうきまみちもも秋乃と記本
秋乃と記本

何乃伝書

舟尾山の秋多はんく
長月廿七日儀因之有夢法公一因志んむ
船乃追福乃乃乃く因十言をうたふ

草庵及こもり 河孫陀乃尊号 百万遍修所
しりりもん 同廿六日也あつて

一身千古月と叫ぶ白紙おゆるをるのう 丁君思え
りし山おれもく我あま 乃乃秋まき切てさひも
舟乃乃のえん秋 乃乃月をせもてし

乃七日念佛修し終りて 乃乃秋まき切て
えんく念修成る向ふと千度も返り 舟尾河孫陀乃
舟尾の草庵の座は梅乃 西にさる枝乃乃乃心
流つていり秋らん

けうれ山西くそ秋と秋の色秋さるる 乃乃秋まき切て
並標

花忍草をせりり せはかくらうの秋の香をいぬ

三業及後法皆先儒三回忘り

師の言を以てし人我をわたりあることを此に教へて

福慶は有り哉と云ふ

初唐の勢をみよと云うれば在妙所に出るべきは

後唐何うの交る事か

師の言を以てし人我をわたりあることを此に教へて

福慶堂鳥より一柱の枝もよ

八世の人を以てし人我をわたりあることを此に教へて

釈教

飛と云ふは此は是を以てし人我をわたりあることを此に教へて

日月星日造空此自三回忘追悼

名を以てし人我をわたりあることを此に教へて

述懐

茶がくに此は此の末のありし一頃定ぬるを世に教へて

これと云ふ我を以てし人我をわたりあることを此に教へて

是心是佛

本を以てし人我をわたりあることを此に教へて

生家即涅槃

去来今を以てし人我をわたりあることを此に教へて

吉祥是身

を以てし人我をわたりあることを此に教へて

煩惱即菩提

深遠さとのを以てし人我をわたりあることを此に教へて

三界唯一心之外無別法

